

新大広報

平成4年度 第2号

(通刊第106号)

平成4年10月31日

編集 新潟大学広報委員会

発行 新潟大学学生部学生課



昭和
四十一年
秋分
瑞穂



「一匹の蟬」 中田 瑞穂

CONTENTS

☆脳研究所創立25周年

脳研究所……………1

☆経済学部国際シンポジウム開催

経済学部長 玉木 義男 ……4

☆外国人日本語弁論大会

A. イシイさん(人文科学研究科)優勝……………6

☆合宿研修

○農学部生産環境科学科2年生合宿研修……………9

○教育学部保健体育科合宿研修……………10

○商業短期大学部新入生合宿研修……………11

☆学内ニュース ……12

☆人と研究

○チューリップの育種

新潟大学名誉教授 萩屋 薫 ……14

☆特別寄稿

○中田瑞穂先生を偲ぶ・生誕百年

脳研究所長 生田 房弘 ……17

☆学生寄稿

○ブリストルへの留学

法学部3年 小林 明子 ……20

○ヨセミテ, クライミング体験記

山岳部 岸本 隆昭 ……22

☆課外活動

○第41回関東甲信越大学体育大会

種目別成績一覧……………24

○関甲信6連覇

新潟大学女子水泳部……………25

☆評議会だより ……26

表紙のことば

新潟大学脳研究所 生田 房弘

日本における脳外科の創始者であり、本学の教授であられた中田瑞穂(なかつたみづほ)先生の描かれた一匹の蟬。

「昭和甲寅秋日 八十一糶翁」とありますから、亡くなられる前年の昭和49(1974)年秋、八十一才の作であります。本号の“中田瑞穂先生を偲ぶ・生誕百年”に述べましたように、先生は還暦のとき自分を稲を刈った後に出てくる芽、「糶」に準え、「糶翁」と呼ばれました。新潟ではすぐ雪が降り、もみはいつでも最早実らないという意からです。

ここには蟬が移動できる広い「間」が描かれている、と私は思います。この絵から私は、脳が病的になったとき出来る細胞外の「間隙」中を細胞が活発に「移動」する現象を連想しました。

「間」のことを先生は「余白」という言葉で表現され、書の畏友会津八一先生との合作をめぐり、「余白」の大切さを述べておられます。

忠実に自分が正しいと思う姿を絵に再現される先生は、ここでも蟬の左羽根にある僅かな傷もそのまま画いておられます。

脳研究所創立25周年

新潟大学脳研究所

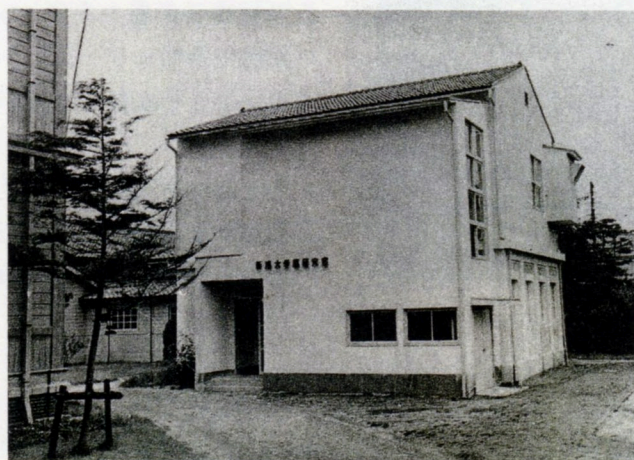
新潟大学脳研究所が大学附置の、部局として独立した「研究所」に認可されて、今年で4分の1世紀、25周年が過ぎます。このため、去る7月25日（土）記念講演会などの創立記念事業が開催されました。

新潟大学医学部の前身、新潟医科大学の頃から、新潟には優れた脳研究者がそろっておられました。この脳研究所の産みの親であり、わが国で最も早く脳神経外科学を新潟に樹立された、当時の外科教室の中田瑞穂教授を始め、故郷が新潟市郊外の脳解剖学者、平澤興先生、さらに脳と直結している耳鼻科や眼科の、そして脳病理学の伊藤辰治教授（元新潟大学長）などが昭和13年に「新潟神経学研究会」を発足させました。これは現在も「新潟脳神経研究会」として活発な全国的、国際的活動を続けています。

さらに戦後の昭和20年代は、新潟で創造さ

れた神経学が文字通り日本全国に活発に発信され続けた時代でした。昭和27年新潟医科大学は新潟大学医学部となりました。その頃臨床と基礎の脳研究者達が連携して脳研究を進める気運が高まっていました。当時の伊藤辰治医学部長は脳研究の体制作りを目指し、中田瑞穂先生の退官を記念し、昭和31（1956）年に学内措置で旧奉安殿（戦中天皇陛下の写真が奉安してあった建物）に木造の2階をあげ、自称「新潟大学脳研究室」を造りました（写真1）。そこには「生理学」「形態学」「化学」の3つの研究室があり、小さいながら念願の共同研究の幕明けでした。

その時の記念講演会で（写真2）、脳外科の研究に強い熱情を傾けておられた、京都大学の荒木千里教授は「今は小さいけれど、将来大きな、立派な、そして日本の誇るべき脳研究所に発展することを祈ってやまない」と、



（写真1）

共同研究の幕明け、自称「新潟大学脳研究室」の誕生。旧奉安殿を改造して造られた。

左側医学部旧木造本館講堂脇に1本の細い「からまつ」が見える。

結んで下さいました。

文部省は早速翌昭和32（1957）年、日本でいち早く脳神経外科学を樹立した新潟の業績を評価し、新潟大学医学部に「脳外科研究施設」を認可しました。自称“新潟大学脳研究室”建物がこれに当てられ、初代施設長に中田瑞穂先生が就任されました。丁度35年前でした。その後、幾つかの基礎部門や、神経内科学等々の部門が整備され、昭和42年には国内で初めて、大学附置の、部局として独立した「脳研究所」に昇格しました。以来25年が過ぎたのです。

この脳研究所の設置の目的は、「脳および脳疾患に関する学理、およびその応用の研究」でした。即ち正常脳に関する「基礎神経科学」だけでなく、ヒトの疾病に関する「臨床神経科学」並びにそれらを結ぶ「病態神経科学」



（写真2）

昭和31年「新潟大学脳研究室」誕生祝賀記念講演会の記念写真。

前列左から久留 勝教授（大阪大学外科）、中田瑞穂先生（63歳）、平澤 興教授（56歳、京都大学解剖）、荒木千里教授（京都大学脳神経外科）、佐野圭司先生（現東京大学脳神経外科名誉教授）、伊藤辰治教授（病理）兼医学部長（52歳、新潟大学）。後列中央植木幸明教授（42歳、新潟大学脳神経外科）。この写真は写真1の前で撮られた。

の3者が、一体となって進展させることに重点がおかれ、それら全てと他の医学分野との連携協力体制が重視され、わが国神経科学の発展に大きな役割を果たしつつ今日に至っております。

現在は8つの研究部門と、日本では唯一の附属「脳疾患標本センター」をもち（写真3）基礎神経科学と病気のしくみについての幅広い研究を行っています。また脳神経外科と神経内科の診療は医学部附属病院で行われ、医学部と一体となって研究や診療は進んでいます。また標本センターには開設当初からの病理解剖の脳標本などが12,000例以上も蓄積され、世界に類をみない貴重な脳疾患標本として生かされています。

これまで有機水銀中毒、スモン病、脳死など、大きな社会的問題となった脳疾患についての研究データは国家的行政の基盤として今日に至っています。さらに現在は、国の重点領域研究である脳の老化や、脳の情報伝達機構についての、全国の研究のまとめ役もこの研究所が担っています。また中国のほぼ全ての大学との共同研究によって、中国における脱髄性脳疾患の中に、Baló病が極めて高い頻度で発生していることなど、国際共同研究の分野でも着実な成果を積み上げつつあります。

このような中で、去る7月25日（土）、文部省始め全国の主要脳研究機関の関係者、県並びに学内諸学部各位の御列席を願い、脳研

究所の全部門を一般公開しました。また、記念講演会は全国規模の毎年の教育事業であり、今年はその第22回となりました「新潟神経学夏期セミナー」の第4日目として行われました。まず辻 省次教授（神経内科学部門）、三品昌美教授（神経薬理学部門）によってそれぞれ脳研究の分子機構からの解説があり、^{はじめ} 萬年 甫 名誉教授（東京医科歯科大学）が「脳と心の五千年」と題する文字通りの脳研究に関する歴史的記念講演会が行われました。

次いでホテルイタリア軒で記念式典があり、ここでは長谷川善一文部省学術国際局長から「学会および社会に一層貢献することを期待する」との祝辞がありました。次いで森 亘 日本医学会会長はじめ国内における諸先達の祝辞、そして武藤輝一新潟大学長の激励の言葉がありました。

式典のあと、記念祝賀会（写真4）が行われ、今後のより力強い研究の発展を期し、それを祝いました。

今日海外から日本を訪れる全ての脳研究者は、少なくとも新潟を訪れて下さるようになっていきます。今後は国内外の研究機関との共同研究の結び目としての地位を更に発展させ、真に研究の実をあげうるか否かこそ重要なポイントと考えられます。



（写真3）

現在の新潟大学脳研究所。

左が脳研究所の研究棟。2階建は脳疾患標本センター。中央のからまつは写真1のからまつそのもの。即ち写真1は今の脳疾患標本センター1階のブレインカッティングルームの前で撮られたことになる。

新潟大学脳研究所は、名実ともに日本の脳研究のセンターとして、全国的に利用できる大きな能力をもった存在になれることを目指し、それを、皆渴望しています。そのためには1日も早く、新潟大学附置のまま、脳についての「全国共同利用研究所」として文部省に認可されることが皆の当面の期待です。

（文責：生田房弘）



（写真4）

記念祝賀会における柴田医学部長による乾杯。
平成4年7月25日（土）。

特別寄稿

中田瑞穂先生を偲ぶ・生誕百年

脳研究所長 生田 房 弘

「^{なかたみづほ}中田瑞穂先生」(写真1)という名前は新潟大学で学ぶ者には記憶されてよい名前かと思えます。

この先生は日本中に先駆けて、新潟で脳手術を始め、脳神経外科学を樹立してゆかれた先生で、新潟大学の前身、新潟医科大学の外科学教室の教授でありました。ですから武藤輝一大学長の先生でもあります。

先生は島根県津和野にて明治26(1893)年4月24日出生され、大正6(1917)年12月東京帝国大学医科大学を卒業されました。そして、まだ上越線のなかった大正11(1922)年2月、上野駅を出発し、碓氷峠を越え、長野を経由する信越線の夜行列車で新潟市に到着されました。それは北原白秋が新潟を訪れ、海は荒海……を詠んだ年でもあり、先生は28才で、新潟医科大学外科教室の助教授、兼附属医学専門部教授に着任するためでした。

先生は当時度重ねてヨーロッパやアメリカ合衆国を訪問されたのですが、特にドイツのハイデルベルク大学のエンデルレン先生(E. Enderlen)の着実な手術や、当時米国で築かれつつあった脳神経外科のイエール大学クッシング(Harvey Cushing)先生らの理にかなった静かな手術に感激されています。

学問には常に「輪」「和」が大切と言われますが、故郷を新潟郊外にもつ脳解剖学者平澤 興先生(元京都大学総長)が新潟大学に着任されたのも中田先生が着任された僅か3年後で、互いに良き生涯の学問の友であった

といわれます。

日本は昭和12(1937)年から日中戦争、そして昭和16(1941)年からは太平洋戦争に突入しましたが、その厳しい中での十年余の研



(写真1)

中田瑞穂先生(55歳)。

「昭和23年5月、運動会」と自筆されています。実はこの時の大学の運動会を教授会議事録で調べると、それは5月29日(土)であり、同じ5月の1日~4日に第48回日本外科学会総会と第1回脳外科学研究会が無事に開催されています。气象台に何うとそれは土、日、月、火曜日とのこと。この前後に日本では初めての脳外科専門書「脳手術」「脳腫瘍」が全国に発売されたのでした。

それぞれ必要であり、しかも、奇妙な名ではあるがさらに、「死」を中心とした第4の医学研究が今後は是非とも必要であると強調されています。

先生はまた、「脳手術」の描写や、我々の身近にある小石や蟬（本号表紙）等々を、驚く程真実の迫力をもった絵を書き残しておられます。先生が81歳で亡くなる前年、私に言われたことは、「私の絵は忠実な写生でしかない。でも、科学も自分が真実だということを忠実に写生し、人に見てもらうものであることを忘れないように」と。

このような先生の教えを受けた外科学教室並びに脳神経外科学部門、そして脳研究所、さらには俳句の関係者が発起人となり、200名近い人々が賛同しました。そしてまず、先生の昭和22（1947）年の句、

学問の静かに雪の降るは好き

を刻んだ句碑を去る6月27日（土）脳研究所中庭に建立し、とめの奥様に除幕して戴きました（写真2）。次いで先生の作品や遺品などをイタリア軒画廊で展示し、そして同日、イタリア軒で200名近い賛同者は先生を偲ぶ集い・生誕百年をもちました。発起人の一人である武藤輝一大学長による挨拶、ついで先生の講演のテープの声と共に黙禱が行われました。

続いて御来賓の豊倉康夫先生（東京大学名誉教授）の挨拶で、中田先生の生まれられた1893年は、神経学の祖シャルコー（J.-M. Charcot）先生（フランス）が亡くなられた年である、とのことばに皆深い感動を呼び起こさせられました。また生前の先生のスライドやビデオそして声に先生を偲び、皆温かい深い感動をひとつにすることができました。

中田先生の数えての生誕百年と新潟大学脳

研究所の創立25周年記念事業が同じ平成4（1992）年であったことも、何故か不思議な思いがしています。時代が移ろうとも、私共はこの新潟という土地で、今後育てられる色々な学問が、広く日本にそして世界に盛んに発信し続ける新潟大学にすることをひたすら誓いあいたいと思います。

なかた・みつほ先生（1893～1975）

明治26(1893)年4月24日	島根県津和野にて出生
大正6(1917)年12月	東京帝国大学医科大学卒業
大正7(1918)年1月	同大学近藤外科に入学、以後4年間勤務
大正11(1922)年4月(29歳)	新潟医科大学助教授、同医学専門部教授
昭和2(1927)年6月(34歳)	新潟医科大学教授
昭和22(1947)年(54歳)	「脳手術」南山堂第1版出版
昭和23(1948)年5月(55歳)	第48回日本外科学会会長／新潟 第1回脳外科研究会（後の日本脳神経外科学会）新潟で主催
昭和24(1949)年(56歳)	「脳腫瘍」南山堂第1版出版
昭和28(1953)年4月(60歳)	還暦。句集「刈上」を出版 ワーレンベルグ症候群の発作
昭和30(1955)年の頃	大脳半球剥除術を行う
昭和31(1956)年4月(63歳)	新潟大学医学部教授を定年退官 同年同月（新潟大学脳研究室室長）、新潟大学名誉教授
昭和32(1957)年4月(64歳)	新潟大学医学部附属脳外科研究施設長
昭和33(1958)年11月(65歳)	紫綬褒賞
昭和34(1959)年3月(65歳)	退職
昭和42(1967)年11月(74歳)	文化功労者
昭和43(1968)年11月(75歳)	日本学士院会員
昭和50(1975)年8月18日(82歳)	新潟市西大畑町5207にて逝去